

# 最新の歯科保存治療を考える



日時

平成26年10月25日(土)

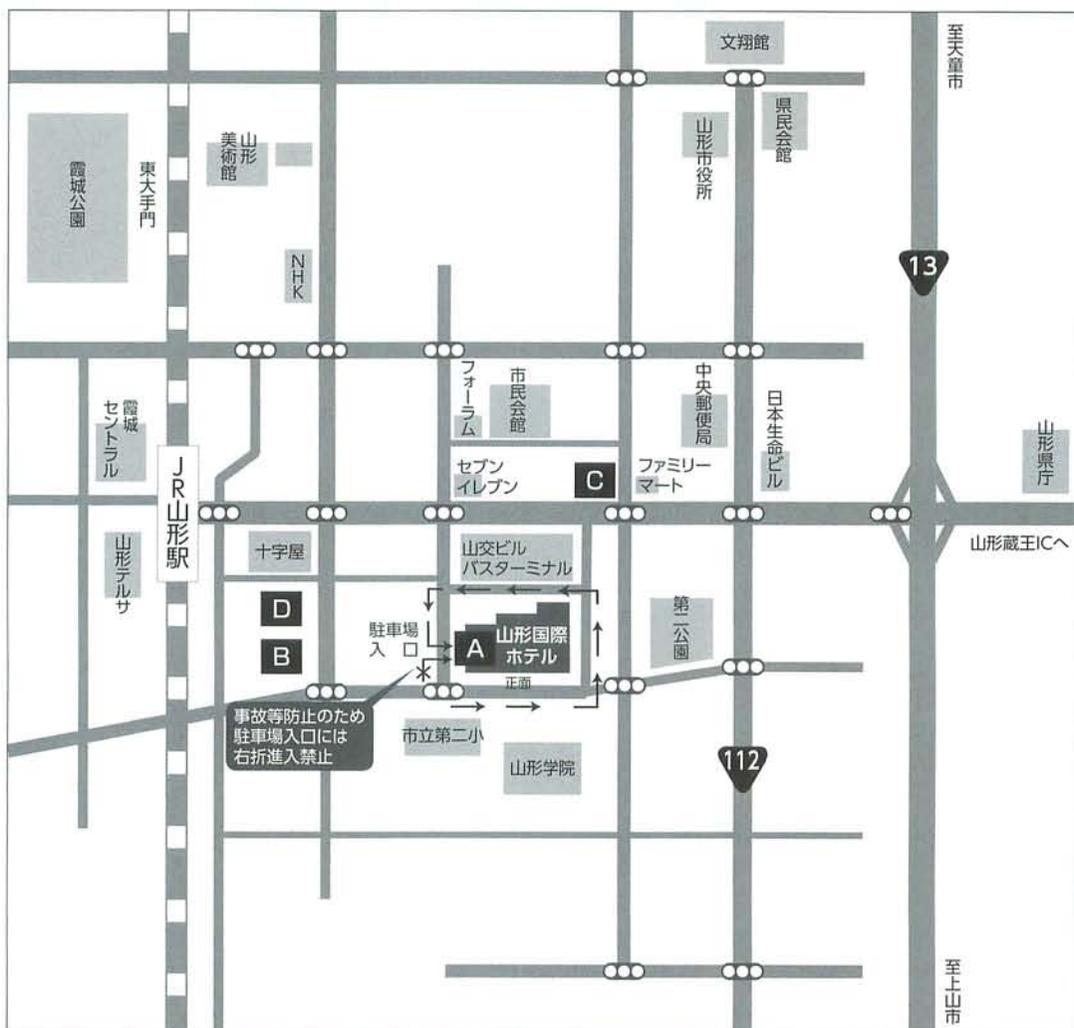
場所

山形国際ホテル

主催

日本歯科大学校友会  
日本歯科大学歯学会  
東北地区日本歯科大学校友会

# 山形国際ホテル案内図



山形県山形市香澄町3-4-5 ☎023-633-1313

## アクセス

山形駅東口より徒歩5分（駅前大通り直進、山交バスターミナル南側隣接）

## 駐車場

- A** ホテル専用地下駐車場（宿泊客優先：1泊500円）
- B** JAパーキング（7:00-2:00）
- C** 山交第一駐車場（6:00-24:00）
- D** 吉田パーキング（24H）

# 平成26年度日本歯科大学東北地区歯学研修会 並びに会員大会

平成26年10月25日(土)

会場 山形国際ホテル

12:30	受付開始			
13:30	開会式	司会	山形県日本歯科大学校友会専務理事	小関 陽一
	開会の言葉		山形県日本歯科大学校友会会長	齋藤 忠範
	来賓紹介			
	来賓挨拶		日本歯科大学校友会会長	近藤 勝洪
			日本歯科大学歯学会会長	勝海 一郎
14:00	会員大会			
14:30	<b>学長講演</b>			
	「日本歯科大学は、今」			
			日本歯科大学理事長・学長	中原 泉
	東北地区歯学研修会	司会	日本歯科大学歯学会評議員	富田 滋
	テーマ 最新の歯科保存治療を考える			
15:20	<b>講演1</b>		座長 南陽市	板垣 彰
	「歯内療法用新器材の特徴と臨床応用」			
			日本歯科大学生命歯学部歯科保存学講座准教授	前田 宗宏
16:30	<b>講演2</b>		座長 鶴岡市	池田 聡子
	「修復治療における歯質保存、ノンメタル、デジタル化への潮流」			
			日本歯科大学新潟生命歯学部歯科保存学第2講座教授	新海 航一
17:40	<b>講演3</b>		座長 米沢市	鈴木 基
	「歯周治療の最新と最善」			
			日本歯科大学附属病院総合診療科教授	仲谷 寛
18:45	閉会の辞			
18:50	記念写真撮影			
19:00	懇親会			

# 日本歯科大学校歌

作詞：小暮 英男／校閲：児玉 花外／作曲：近藤栢次郎／編曲：前田 俊明

お お ぞ ら な が る る あ か つ き の  
 か ね の ひ び き に あ け そ む る  
 ふ よ う は っ だ の す が た こ そ わ  
 れ ら が ぼ こ う の ま も り な れ  
 ち は よ し く だ ん ふ じ み は ら な  
 は よ し に ほ ん し か だ い が く

大空流るる暁の

鐘の響きに明け初むる

芙蓉八朶の姿こそ

吾等が母校の守りなれ

地はよし九段富士見原

名はよし日本歯科大学

高鳴る血潮の香をのせて

岸打つ文化の波頭

振り立つべき同胞の

甘幸もたらす学徒われ

地はよし新潟浜の浦

名はよし日本歯科大学

今さし出ずる朝日子の

平和と愛との輝きに

照りそう真紅の光こそ

吾等が母校の使命なれ

地はよし九段富士見原

名はよし日本歯科大学



なか はら せん  
**中 原 泉**

日本歯科大学理事長・学長  
日本歯科大学校友会会頭

## 「日本歯科大学は、今」

100という数字には、インパクトがあります。

私どもの日本歯科大学は、2006年に創立100周年を迎えました。

一卒業生として、100周年に立ち会えたことは幸せでした。

さらに2011年3月11日に、第100回卒業生を送りだしました。

その卒業式のあとに、東日本大震災が発生し、私どもには忘れられない日となりました。

このたびは、日本歯科大学の現在と歯科大学の事情についてお話をいたします。



まえ だ むね ひろ  
前 田 宗 宏

日本歯科大学生命歯学部  
歯科保存学講座准教授

## 「歯内療法用新器材の特徴と臨床応用」

抜髄や感染根管治療における拡大形成操作は、根尖歯周組織の炎症の原因となる根管内の細菌、感染象牙質、抗原物質、歯髄壊死分解産物などの有機物を完全に除去し、緊密な根管充填が可能な形態に根管を整えることにあります。しかし、従来の治療体系では、根管系を2次元画像のデンタルX線写真と手指の感覚を頼りに、文字通り手探りで処置していくことから、非効率で予後の見極めが難しい治療とされてきたのも事実です。根管治療は、狭小で彎曲するなど複雑な形態を有する根管においては非直視下での繊細な形成手術と考えられ、歯科治療のなかでもとくに時間と手間かかる代表選手となっていたのではないのでしょうか。加えて、日常臨床において遭遇する頻度の高い再根管治療では、鑄造冠、根管ポスト、ガッタパーチャ材などを注意深く取り除かなくてはならず、同時に穿孔や急性化に対する配慮も必要となります。これらの様々な問題点を解決するため、多くの歯内療法用器材が開発・実用化され、治療の確実性は向上し、効率化も図られてきました。簡便で確実な治療結果が得られる新器材の普及は臨床家にとって大きな福音となりますが、根管の徹底的な清掃、根管の消毒および根管の緊密な封鎖といった根管治療の基本原則を十二分に理解し応用することで、新器材の活用範囲もますます広がると思われます。

過去10年の歯内療法に関連する新器材としては、ニッケルチタン製ファイル、MTA製剤、超音波形成器具、接着性根管充填材、コーンビームCT (CBCT)、歯科用マイクロスコープなどが挙げられます。1990年代に入り、多くのニッケルチタン製エンジン用根管拡大器具が考案されましたが、ニッケルチタン合金はステンレススチールに比べて強度的に劣っているため、根管壁への食い込みが生じるとエンジンの回転力により破断する可能性も高くなることから現在では様々な改良、デザインの更新がなされています。最近のトピックスとして、破断しにくいニッケルチタン合金の開発、さらには器具の回転様式として反復回転運動 (Reciprocating motion) が考案され、

破断の危険性を回避しながら、1本のファイルで根管の拡大形成を完結するというシステムも紹介されています。また、画像診断においては、CBCTの開発により歯科臨床における顎骨の三次元的情報が得られるようになりましたが、根尖付近の画像診断においては従来からのデンタルX線写真、パノラマX線写真の読影を先ず行い、得られた情報だけでは解決が困難な顎骨および解剖学的ランドマークの位置関係や病変の広がりを確認するためにCBCTが適用されるべきであるとの指摘もあります。新器材の診療室への導入にあたっては、第一にご自身の診療システムに沿っているかどうかを検討することが大切です。そのうえで、それぞれの器材の適用範囲、使用時の留意点を十分に把握し、適切に使いこなすためのポイントを整理することが重要です。

本講演では、現在国内で入手可能な歯内療法用新器材を紹介するとともに、各器材の特徴を整理し、臨床応用時の要点についても解説する予定です。

## 略 歴

---

昭和60年 日本歯科大学歯学部 卒業  
日本歯科大学大学院歯学研究科歯科保存学Ⅰ 入学  
平成1年 日本歯科大学大学院歯学研究科歯科保存学Ⅰ 修了  
平成2年 日本歯科大学歯学部歯科保存学教室第1講座 助手  
平成8年 日本歯科大学歯学部歯科保存学教室第1講座 講師  
平成15年 日本歯科大学歯学部歯科保存学講座 助教授  
平成19年 日本歯科大学歯学部歯科保存学講座 准教授  
日本歯科保存学会 歯科保存治療指導医・専門医



しん かい こう いち  
新 海 航 一

日本歯科大学新潟生命歯学部  
歯科保存学第2講座教授

### 「修復治療における歯質保存、ノンメタル、デジタル化への潮流」

接着システムの発展が歯科治療に大きな変革をもたらし、歯冠修復において修復材料の接着はもはや欠かせないものとなっております。齲蝕治療における接着システムの活用は、罹患歯質のみの削除で健全歯質の可及的な保存を可能にし、MIコンセプトの実現に大きな役割を果たしています。また、光重合型コンポジットレジンはフィラーのハイブリッド化により物性が著しく向上し、コンポジットレジン修復の適応範囲が広がりました。また、近年では、従来のユニバーサルレジンに加えてフロアブルレジンやバルクフィルレジンも市販され、このような新タイプのコンポジットレジンは充填時の操作性を向上させています。さらに、自費用コンポジットレジンは、多種類のシェードを兼ね備え、マルチレイヤリングテクニックによりコンポジットレジン修復とは思えない審美修復が実現されるに至っております。

昨今の接着システムに目を向けると、1ステップ型セルフエッチシステムが主流となりつつあります。補修修復を前提とした多目的接着システム、すなわち、接着対象が歯質、コンポジットレジン、金属およびセラミックスなど多岐に及ぶ場合でも、一括して同時に接着処理できるシステムが開発されています。また、セルフアドヒーシブレジンセメントすなわち自己接着型レジンセメントも登場し、修復操作の簡便化を図ろうとしています。まさに接着システムの開発は日進月歩の勢いですが、いずれの製品も使いこなしのポイントがあるので、それを熟知したうえで上手に使わないと接着性能を十分に引き出すことができません。

さらに、接着修復法は直接修復のみならず間接修復にも大きなメリットを与えています。接着性ブリッジは健全歯質の削除量を大幅に軽減しました。支台歯の歯軸方向が異なるために止むを得ず行っていた便宜抜髄も接着性ブリッジを応用すれば回避することができます。近年需要が増しているハイブリッドセラミックスあるいはセラミックスを用いた歯冠修復は、接着システムを応用しなければ早期に破折、脱落する

危険性が高いことは周知の事実だと思います。

一方、臼歯部の間接修復で主として使用されてきた12%金銀パラジウム合金を代表とする歯科用合金は、金属料金の高騰により医療者側に大きな負担を与えていると思います。また、審美修復を希望する患者さん、金属アレルギーをもつ患者さんも増えてきているようです。このような背景からメタルインレー修復を適応するケースは減少しているのが現状だと思います。また、小白歯に対するCAD/CAM冠が保険導入されたことはご存じの通りです。まさに、修復治療は「ノンメタル・デジタル化への潮流」に乗って、高分子系材料あるいはセラミック系材料を用いた修復が主流となり、歯科用合金は徐々に駆逐されていく時代に移行しつつあるのではないのでしょうか。

今回の講演では、コンポジットレジン修復を中心とした接着性歯冠修復の最新情報と近い将来に鋳造法の代替えになるであろうCAD/CAM法について解説したいと思います。

## 略 歴

---

- 昭和56年 日本歯科大学新潟歯学部 卒業
  - 日本歯科大学新潟歯学部歯科保存学教室第2講座 助手
- 昭和62年 日本歯科大学新潟歯学部歯科保存学教室第2講座 講師
- 平成1年 日本歯科大学新潟歯学部歯科保存学教室第2講座 助教授
- 平成4年 米国アラバマ大学バーミングハム校歯学部 客員講師（～平成5年）
- 平成23年 日本歯科大学新潟生命歯学部歯科保存学第2講座 教授

## 所属学会

---

日本歯科保存学会（理事、専門医・指導医）、日本歯科審美学会（理事、認定医）、日本接着歯学会（理事、認定医）、日本レーザー歯学会（理事、認定医）、日本歯科色彩学会（理事）



なか や ひろし  
**仲 谷 寛**

日本歯科大学附属病院  
総合診療科教授

### 「歯周治療の最新と最善」

科学は日々進歩を遂げています。もちろん、歯科医学の進歩も例外ではありません。歯周治療においても、不可能とされていた歯周組織の再生も、1980年代には組織再生誘導法（GTR法）が、1990年代にはエナメルマトリックスデリバティブ（エムドゲイン®）が臨床応用されはじめるに至り、現在では歯周組織再生という用語も珍しいものではなくなっています。最新の歯周治療と云ったら、どのようなものがあげられるでしょうか。未だ研究段階でヒトに応用できる可能性が示唆されるといったものでは治療とはいえません。そのように考えると、歯周病の原因除去については、薬物療法、レーザーを用いた歯周治療、歯周組織再生については成長因子等の応用といったものと思われまます。

歯周炎は細菌により発症することから、さまざまな感染症と同様に、歯周治療においてもペニシリン系、セフェム系などの抗菌薬が、従来から使用されてきています。しかしながら、その多くは、急性症状に対する対応など応急処置的なものです。現在、推奨されている歯周病患者における抗菌療法では、計画的使用の徹底、目的の明確化、副作用の再確認、細菌検査の必要性を基本原則としています（歯周病患者における抗菌療法の指針2010、日本歯周病学会編）。一方、レーザーの応用については、Er：YAGレーザーによる歯石除去の効果について、エビデンスが得られるようになり、非外科的および外科的歯周治療に臨床応用されはじめています。そして、従来のスクレーピング・ルートプレーニングとは異なり、非接触にて使用できることから、根面の溝、陥凹部などに対して、特に有効な手段と期待されています。

歯周組織再生療法については、成長因子等の生物学的方法としては、海外で使用されているものには血小板由来成長因子を使用するGEM21®、日本にて臨床治験が進行している線維芽細胞成長因子などがありますが、現時点で日本にて認可されている方法はエムドゲイン®のみです。

さて、最新の歯周治療により、完全に歯周病をコントロールできるのか？従来の治療法は不要なのか？正常な歯周組織に再生できるのか？と問われれば、否といえるでしょう。現在までのところ、最新の歯周治療の出現は、治療の選択肢が増えたことに他なりません。臨床現場において、「最新の歯周治療」と「最善の歯周治療」とは同義語ではありませんので、従来の歯周治療との利点・欠点を比較し、治療方法を選択する必要があります。「最新」をうたい文句に闇雲に新しい治療法を行うことは、避けるべきでしょう。日常臨床における治療方法の選択は、治療の理論的根拠(エビデンス)、実践のための技能(スキル)、患者の望むところ・価値観(バリュー)の視点から考える必要があります。本講演では、「最新」と「最善」を対比しながら、歯周治療を考察してみたいと思います。

## 略 歴

---

昭和60年 日本歯科大学歯学部 卒業 (74回)

平成1年 日本歯科大学大学院 修了

日本歯科大学歯学部歯周病学教室 助手

平成3年 日本歯科大学歯学部歯周病学教室 講師

平成5年 University of Texas Health Science Center at San Antonioへ留学

平成10年 日本歯科大学歯学部歯周病学教室 助教授

平成19年 日本歯科大学附属病院 教授

日本歯周病学会 専門医・指導医

# 平成26年度日本歯科大学 東北地区歯学研修会準備委員会

## 準備委員長

志賀博 (75) 日本歯科大学歯学会副会長

## 副準備委員長

小倉陽子 (87) 日本歯科大学校友会常務理事  
小松義典 (64) 秋田県日本歯科大学校友会会長  
宮本昭雄 (59) 福島県日本歯科大学校友会会長  
佐藤真奈美 (73) 宮城県日本歯科大学校友会会長  
福成和幸 (63) 岩手県日本歯科大学校友会会長  
嶋谷保壽 (58) 青森県日本歯科大学校友会会長  
齋藤忠範 (57) 山形県日本歯科大学校友会会長

## 準備委員

宮田一 (58) 山形県日本歯科大学校友会副会長  
本間宗一 (65) 山形県日本歯科大学校友会副会長  
鈴木一則 (66) 山形県日本歯科大学校友会副会長  
小関陽一 (70) 山形県日本歯科大学校友会専務理事  
奥山俊 (59) 山形県日本歯科大学校友会理事  
後藤寛 (60) 山形県日本歯科大学校友会理事  
冨田滋 (67) 山形県日本歯科大学校友会理事  
林隆一 (67) 山形県日本歯科大学校友会理事  
小池亮 (68) 山形県日本歯科大学校友会理事  
高橋俊裕 (71) 山形県日本歯科大学校友会理事  
迎田健 (75) 山形県日本歯科大学校友会理事  
今野順彦 (80) 山形県日本歯科大学校友会理事  
鈴木利作 (59) 山形県日本歯科大学校友会監事  
徳光義博 (64) 山形県日本歯科大学校友会監事  
鈴木豊 (71) 山形県日本歯科大学校友会監事

— MEMO —

MEMO

— MEMO —

